



【巻頭言】

「中庸」の精神を今、あらためて教育の場に

大玉村教育委員会教育長 渡辺 敏弘

今年も残り少なくなりました。校長先生方におかれましては、日々の教育活動に加え、さまざまな学校行事や対外行事へのご指導・ご支援にご尽力いただいておりますことに、心より感謝申し上げます。また、私のつたない思いの一端をお伝えする機会をいただきましたことについて、重ねて感謝申し上げます。

さて、釈迦に説法となることは覚悟の上で、あらためて「中庸」ということについて考えてみたいと思います。「中庸」は、儒教の教えの中でもとりわけ重要視されてきた概念であり、「極端を避け、過不足なく、調和の取れた状態を保つこと」を意味します。私が大切にしている（大切にできているかいしさか不安なので、大切にしたいと願っている、が正しい表現かも知れませんが）言葉（考え方）の1つです。この考え方は、変化の激しい現代社会において、そして多様化する教育現場において、なお一層その価値を増しているように思われます。

子どもたちの成長は、直線的なものではありません。一人一人が異なる個性や背景を持ち、発達のスピードや学びのスタイルも様々です。そこに画一的な指導や、過度な期待・干渉が加われば、子どもたち本来の可能性を狭めてしまうことにもなりかねません。一方で、自由や自発性を重んじるあまり、一定の規律や社会性を軽視すれば、集団の中での学びや成長の機会を失うことになるかも知れません。そうした中で求められるのが、「中庸」の視点です。厳しさと優しさ、指導と見守り、理想と現実、そのどちらか一方に偏るのではなく、子どもたちにとって今、最もふさわしい「バランス」を探り続ける姿勢は、校長としてのリーダーシップの根幹を形づくる大切な要素ではないでしょうか。

また、「中庸」は、教育方針の決定や教職員間の調整、保護者や地域との連携など、学校運営全体にも通じる理念です。現在、学校では（あるいは教育界では）、人材の不足、デジタル化への対応、多様性への対応、授業や支援の在り方、地域や保護者との連携、働き方改革など、たくさんの課題や要求があり、大きな改革や迅速な対応のためには、かなり強力な思い切った決断が必要な場面もあることは否定しません。しかし、成果を求めて強引にことを進め、また短いスパンで振り戻しがくるような手法を取れば、その影響を最も強く受けるのは学校の主役である子どもたちです。多様な意見が交錯する中で、どのように対話を重ね、合意形成を図っていけばよいのでしょうか。その際にも、極端に走らず、互いの立場や思いを尊重しながら着地点を見出していく「中庸」の姿勢が、教育現場の安定と前進に寄与するものと考えております。

教育は、未来を担う子どもたちの人生に深く関わる営みですから、私たち大人の判断や姿勢には、常に深い責任が伴います。その重みを自覚しつつ、心穏やかに物事の本質を見つめ、「バランス」の取れた選択をしていく必要があると思います。そのような「中庸」のあり方を、今こそ私たち自身が体現し、子どもたちに示していきたいものだと思います。

今年はどんな冬になるのでしょうか。冬の到来が早く、雪も多いという有り難くない予想もあるようです。しかし、たとえたくさんの雪が降り積もり、厳しい寒さの冬であったとしても、互いの立場や思いを尊重し合い、子どもを真ん中に据えた、温かい学校であり続けたいものだと思います。これからも、会員の皆様にとって充実した日々となりますよう、今後のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

【小教研関係全般】

小教研について思うこと

福島県小学校教育研究会安達地区会長

佐藤 瞳弘

(二本松市立原瀬小学校長)

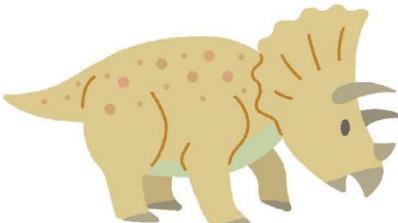
まず、10月16日（木）に安達公民館で実施した、県小学校教育研究協議会道徳研究部会安達地区大会の研究協議及び講演会に多くの皆様にご参加いただいたこと、心より御礼申し上げます。皆様ご存じとは思いますが、今回、令和7年度から9年度まで3年間、第IX期として道徳の研究を承っているところです。令和8年度、9年度の計画についてもおおよそ立てることができ、これから着々と進められるところと思います。今後とも、皆様のご協力をお願いいたします。

私ごとにはなりますが、小教研に所属して38年。記憶に間違えがなければ、ほぼ90%にあたる30余年間、理科部に所属していました。自分にとっての小教研理科部は、部員の個性が炸裂した、とにかく行動が先んずる、とりあえずやってみることが最優先の居心地の良い場所でした。授業実践の話はそこそこに、ペットボトルロケットを校庭で飛ばしたり、「実験の成功・失敗を左右するポイントはここだ！」と、頼まれもしない実験を実演したり、人によっては悲鳴を上げてしまうような昆虫だけの画像を見せびらかしたり。自前の液体窒素のボンベを持ってきてパフォーマンスを始めた部員を見たときは、どれだけ実験好きなんだよ！と突っ込みを入れてしまいたくなるほどでした。そんな奇天烈（キテレツ）な経験は、単なるネタで終わるのではなく、翌日からの授業実践（＝実験）に役立つものばかりでした。それこそが居心地の良さの源でした。そのようなことから、自分には「小教研に所属しない」…という選択肢はありませんでした。



何年か前、希望する部員が存在しないため、部長（＝自分）として一人で部に所属していたことがありました。そのような部にも県大会があり、集まった部長は自分と同じような一人部員（＝部長）が極めて多く、「〇年後に役割があるが、果たしてその役目を果たすことができるのでしょうか？」と不安を共有する県大会も経験しました。

その場で私が感じたのは、居心地の良かった小教研ではなく、組織が巨大になってしまい、自身で生き方を選ぶこともできなくなってしまった哀れな生物の晩年を見ているような感覚でした。かくいう理科部も、自分が教諭として所属していたときのメンツがほぼそのまま現存し、半数が管理職で学級担任は数えるほどとなり、授業研究会も何周目か分からぬ状態となり、手詰まり感をひしひしと感じていたところでした。



自主的団体だからこそできる型にはまらない、「やってみたい！」を実現できる場が小教研だろうと思います。このまま衰退の一途をたどり、維持するだけで精一杯だ・・とならない面白い活動をそれぞれに計画できたら幸せだなと感じます。

【特集テーマ】
「福島に誇りをもち、多様な他者と協働しながら 持続可能な社会を創る子どもの育成」
誇りを宿す教育活動となるように

二本松市立二本松北小学校 児山 秀典

子どもたちに限らず誰にとっても、自分への誇りを手にすることは、容易なことではありません。自身がもつ弱さや甘え、不安と対峙し、自分を奮い立たせる学びや経験、伝統文化や歴史の継承に係る人やモノとの主体的な関わりの中で、実感を伴う成果や喜び、達成感や充実感等の感情が醸成されて初めて、誇りは身体に宿るのだと思います。誇りは、行動や判断をよりよい自己決定に導く感情であり、この感情を子どもたちに育むことは、学校にとって大切な役割だと考えます。

今年度の学習発表会、どの学年、特設クラブも練習の成果が存分に發揮された見応えのある舞台となりました。中でも、生命の尊さ、友情を主題として劇を演じた6年生の子どもたちは、一段と輝きを放ちました。子どもたちをよく知るご家族、そして在校生や教職員の多くが、その想像を超える演技、表現に驚き、感極まる場面がたくさんあったのです。これまでの学びを生かし、脚本にちりばめられた台詞の意味を味わい、繊細に声と身体の豊かな表現に広げ、気付きと話合いを繰り返して演技を磨き合い、子どもたち自身が愛する舞台に仕上げていきました。担任の先生の子どもたちに求めた演技のレベル、周到な準備や仕掛け、見取りと評価等、子どもへの愛情やこの学びの舞台を構想した思いは、とてもなく大きかったです。そんな思いと時間を積み重ねてこそ、あの子どもたちの姿だったのだと納得します。

子どもたちがその発達や特性に応じて、持てる力を存分に發揮し挑む学び、そして子どもを愛し、情熱を注いで創り上げる私たちの教育活動が、ひとつでも多くの子どもの生涯に誇りとして宿り、よりよい未来、社会を創る力となっていくようこれからもチーム二本松北小でがんばっていきます。



【特集テーマ】
「ふるさとを誇りに思う」とは

二本松市立油井小学校 高橋 政喜

10月16日～17日に、福岡市で行われた全国連合小学校長会研究協議会に参加させていただきました。2日目のプログラムに講演がありました。講師は、福岡出身の彫刻家外尾悦郎氏。

氏は、中学・高校の定時制非常勤講師として勤務された後、1978年に単身バルセロナに渡り、アントニ・ガウディの建築、サグラダ・ファミリアの彫刻に携わり、2005年に氏の作品群がユネスコの世界遺産に登録されました。



東洋人がたった一人でスペインに渡り、彫刻家として生きていく、さらにはサグラダ・ファミリアという未完の傑作と言われる建築物に携わる、それが並大抵の覚悟ではできないことは、想像に難くありません。彫刻家として信用を得て、サグラダ・ファミリアの精巧な彫刻を表現するまでには、大変な努力と異文化と戦う強靭な精神力が必要だったようです。

外尾氏は、その力の源を「origin オリジン」＝「ふるさと」と表現し、「ふるさとを強くもっている人はいくらでも遠くまで行ける」と述べました。その意図は何か。東洋人として「異文化に抗うときに、迎合するのは簡単だが、折れてはいけないところでは自分を曲げない」ことが、世界で認められることにつながったと述懐し、それを教えてくれたのが「ふるさと」であると述べました。氏にとっての「ふるさと」とは、「たった一人になっても、自分をまっすぐに律してくれる生き方を教えてくれた場所」であり、それを最も身につけることができたのは、小学校だったと言います。

ふるさとを誇りに思う子どもを育てたい、そう考えた時、地域の自然や偉人、特産物ばかりに目を奪われてはいけない。ふるさとで学んだこと、学びを通して得た生き方こそが「ふるさと」であることを忘れずにいたいと感じました。

【特集テーマ】
岩根で育つことの喜びを

本宮市立岩根小学校

安藤 靖

先日の昼休みのことです。窓の外に、校庭を真一文字にレーキかけする一人の女子児童の姿を見つけました。まだ誰も遊びに出てこない校庭でレーキかけが1往復し、そして2往復…。私は初めて見る光景に「なんだ、なんだ?」と少し興奮しながら、「これは!」と急いで校庭に飛び出しました。事情を聴くと…「運動委員会です。」「班ごとにやることを決めたんです。」と答えてくれました。同じ班の仲間も加わり、校庭全面のレーキかけをしました。(もちろん私も手伝いました。)

岩根小学校では「誰かのために何かをしたい。みんなでその夢叶えよう。」を児童・職員・家庭・地域で共通の合い言葉とし、「たいよう輝く学校」を目指しています。児童は、優しさや思いやりの心について道徳科で考え、協力し実行することを学級会や特別活動を中心に体験します。また、保護者や地域、ボランティアの方々がいつも自分達と岩根小学校を大切に思い、支え守ってくれていることを感じています。こうして、岩根っ子の「自立」と「共生」の心が育っていきます。

今年も、教育実習生として卒業生が帰ってきました。「岩根はいいところです。みんなが優しい。外(県外)に出ると、全然違います。岩根小学校はいい学校です。」と話してくれます。こう話してくれる実習生の担任だった先生はもちろん、これまでの岩根小学校を支えてくださった数多くの職員の皆様、学校運営協議会や岩根の子どもを考える会に携わってくださっている保護者や地域の皆様への感謝の気持ちでいっぱいになります。

朝、岩根小学校の校庭には、集団登校の班長さんに「ありがとうございました」とお礼を言ってから教室に入る児童の姿が、みんなのために校庭の草むしりをする児童の姿が、花の世話をする児童の姿が、体育の準備のために校庭のレーキかけや白線ひきをする職員の姿が見られます。つながれ。

【趣味・随想】
「豊かなスポーツライフ」を楽しむ

大玉村立玉井小学校

五十嵐 洋之

小学校学習指導要領解説「体育編」には、教科の目標として、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現する・・。」と記されている。「体育人」を自認するものとして、「生涯にわたって豊かなスポーツライフ」を送りたいと常々思っている。教職に就いてからの主なスポーツライフは以下のとおりである。

【ゴルフ

社会人2~3年目。「やっぱり社会人の嗜みはゴルフだよな~。」ゴルフの何たるかも分からず、「ゴルフ」というその大人びた響きだけに憧れ、同じ職に就く旧友3人で、思いついたその日に同じ値段のゴルフセットを購入した。そして、その日のうちに練習場へ。それまでいろいろなスポーツを経験し、運動神経には自信があった。しかし、「当たらない。真っ直ぐ飛ばない・・。」ショックを受けた。

「前に飛ぶようになってからコースに出ましょう。」レッスン書の教えを忠実に守り、仕事帰りにコースデビューを夢見て毎日のように練習場に通った。デビュー戦の初ショットは「たまたま」青空に吸い込まれるように飛んだ。130回のうちの1回のナイスショットが忘れられない。それからおよそ30年。「下手の横好き」が年々高じている。すごく楽しい。

【サッカー

社会人6~7年目。安達地区に勤務していた旧友からの連絡。「先生方とサッカーチームをつくる。一緒にやろう。チームの名前は『FC HIYAMA』。フォワードできるよな?」週1回、練習のため船引から岩代運動場に通った。2年目は二本松市の社会人リーグにも加盟した。他のチームは10代も多数の若いチームばかり、惨敗の連続だった。しかし、惨敗続きの中で「たまたま」決まった貴重なゴールが忘れられない。それからおよそ25年。プレイはできないが「口弁慶」が年々高じている。すごく楽しい。

これからも、数少ないのであろう「たまたま」を求めながら、生涯にわたって「豊かなスポーツライフ」を楽しみたいと思う。

【新会員として】

【趣味・随想】

山々を眺めながら

二本松市立塩沢小学校

荒川 修

西側に安達太良山、東側には布引山や木幡山、口太山を眺め、熊鈴を鳴らしながら登校する子どもたちとあいさつを交わす。自分から元気にあいさつをする子、あいさつに答える形でする子、目を反らしながらする子、無反応でうつむいたまま通り過ぎる子など様々。期待するあいさつの姿はあれど、子どもの背景にある家庭環境等を考えると、まずは登校できていることにうれしさを感じる。

あいさつの仕方で気になる子がいれば、登校後にその子の笑顔が見られるか様子を観ている。笑顔は授業の時でも、休み時間でも構わない。午前中になかなか笑顔が見られない場合には担任へ伝える。そして、下校の際にもあいさつをしながら表情を確認する。気になる子の笑顔が見られたり、朝よりも表情がよくなっていたりしたときには担任や関係した職員へ様子を伝え、子どもへの関わりについて称賛するよう努めている。一人一人をじっくり観ながらできる小規模校のよさと言える。

二本松市教育委員会へ着任のあいさつへ訪問した際に「塩沢小学校は、二本松城が今の場所に移る前にあった由緒ある所にある」と聞いた。教育委員会発行パンフレット『史跡 二本松城跡』を見ると、二本松城の歴史の始めに確かに「応永21（1414）畠山氏4代満泰が塩沢の田地ヶ岡より白旗ヶ峯に居を移し、二本松城と号す。」とある。

4月のPTA総会は会員出席率が100%で、私にとって初めての経験だった。地区のある会の総会の中で「子どもたちのために」という言葉を何度も聞いた。

集団の中での学びを生かして、これからに希望をもつ笑顔いっぱいの子どもたちを育み、歴史と伝統に満ちた地域や保護者の方々の期待に答えるべく、山々を眺めながら今日も子どもたちを待つ。

小中一貫校への移行に向け

二本松市立東和小学校

齋藤 直

2年前には東和中の校長として、全く同じ通勤路を通っていましたが、4月から隣の新しくて明るい校舎、そして素直で純粋な子どもたちにあふれた小学校への通勤に戸惑う毎日でした。教頭時代に、いわきで小中一貫推進校に勤務したことがあります、その経験を来年度からの小中一貫校への移行に活かしていかなければと思っているところです。

さて、「小学校と中学校の文化の違い」と言われますが、小学校の先生方の真面目さ、緻密さには本当に頭が下がります。特に低学年は、自分での判断ができず、行事等では常に細かな指示や対応が必要です。そうした面では、けがや体調不良なども頻発し、本当に子どもたちがいる時間帯は気が抜けないと感じています。中学校とは保護者への対応や生徒指導案件も異なるところもあり、文化の違いはこうしたところでも生じているのだと感じます。中学校の目線を活かしつつ、キャリア教育やリーダーの育成などの面で新しい風を入れられればと感じています。

東和小では、昨年度から「東和キラリフィールドワーク」を実施しています。縦割り班で針道、戸沢、太田、木幡の4地区を地域の方の案内でバスや徒歩でまわったり、体験活動を行ったりしました。自分たちで地域内を行き来することが少ない（できない）地域もあり、自分たちの住んでいる東和地区の良さを見つけ、感じる事ができた1日でした。こうした取組を継続しつつ、こども園や中学校との連携を進め、地域の期待に応えられるよう努力してまいりたいと思っています。



<羽山から見る安達太良山>

【新会員として】

「守りに強い子を育てる」

本宮市立五百川小学校

佐藤 雅彦

いわき市での3年間の勤務を終え、小学校長会安達支会のメンバーに加えていただき、半年が過ぎました。教職人生で初めての安達地区での奉職に多少の緊張感はあったものの、皆様には温かい雰囲気で迎えていただき大変ありがとうございました。

異動してみると、「前の学校の子どもと比べてどうですか?」といった質問を受けることがあります。確かに浜の子、山の子、都会の子といった目で見ると、多少の差異はあるかもしれません、基本的に子どもは子どもであるということは、どの地域でも不变なものです。嬉しいときは笑い、悲しいときは泣き、褒められれば喜ぶ。そういうた当たり前の感情をもち、素直に行動しているのが小学生なのだと思っています。

ただ、「10年一昔」という言葉があるように、時代の変化には抗えず、変わっていく子どもの姿もあるような気がしています。特に、一番感じるのは「踏ん張りがきかない子が増えた」ということです。若い頃に「守りに強い人間になれ」と言われたことがあります。人間だれでも調子よく攻めているときにはそれなりの結果が出せるものだが、劣勢に立たされ守りに入った時、本当の実力が試されるものだという意味だそうです。本校でも元気に走り回っていて転んだとたん大泣きして何も話せなくなってしまう児童、気合いを入れて臨んだテストで100点がとれずに落ち込んでしまう児童、友達の何気ない一言が気になってしまう児童等々。集団生活をする学校では、自分の思い通りにならないことはたくさんあります。でも、そんな時も逃げ出さずへこたれないたくましい子どもを学校では育てていきたいと考え、教職員一同で取り組んでいるところです。

こんなことを思いながらも、我々はつい楽をして格好良く攻めることばかりを考え、逆に攻められそうになると逃げてしまってはいないだろうか、そんな後ろ姿を子どもたちに見せてしまってはいないだろうかと、私は自戒しています。



撮影:国際総合企画

【新会員として】

「古きを受け継ぎ新しきを創る」

本宮市立和田小学校

石井 隆博

蛇の鼻遊楽園にみずいろ公園、北郡山ゴルフクラブとビール園、それとソースカツ丼の美味しい店があるらしい。本宮市について訪れたことや知り得ていたことはこれくらいでした。

7月24日、この4月に新たに本宮市に着任した教職員を対象に、市内フィールドワーク研修が開催され、本宮むかしむかしの会代表の伊藤豊子氏を講師に、他校の先生方と共に市内を巡りました。蛇の鼻御殿の絢爛豪華な装飾、歴史と伝統ある安達太良神社、一方で近代的な設備を誇る歴史収蔵館やしらさわ夢図書館に本宮市ふれあい美術館。英國ウイリアム王子と縁のある英國庭園など、本宮市にはこれまで知らなかつた素晴らしい場所が沢山ありました。中でも本校の学区内に鎮座する「岩角山『岩角寺』」は比叡山天台宗の由緒ある寺で、柳津町の虚空蔵尊と並びかつては参拝者の多く訪れた古刹です。今でも毎年正月に行われる「大梵天祭」は多くの参拝者で賑わうそうです。

赴任して以来、地域の方々と話す中でよく話題となるのが、和田の未来についてです。少子化、過疎化の波は和田地区にも確実に及んでおり、地域のよさをどう伝えて、地域をもり立てていけるのか。本宮市も含め、日本全体の地方に共通して言えることです。

先に述べたように、本宮市には他に誇れる魅力が沢山あります。それは名所や施設にとどまらず、地域や学校をもり立てようとする地域住民の熱意や、協力を惜しまない人柄など、古くから育まってきた郷土を愛し敬う心情です。

和田のよさを継承しつつ、新たな魅力を創造していくような子どもたちを育てていきたいと思います。



和田小校歌